

『劣情と代償』

著：魔鬼砂夜花

ill：麻生 海

「野郎。やっぱりいやがった」

まるでこうなる事を見越していたように、黒い車体が停まっている。

高嶺は一直線に車に向かうと、むんずとドアノブを掴み、引く。

だが、開かない。

てっきりあっさり開くと思っていただけに憤(ふん)慨(がい)も一際で、高嶺は怒りを爆発させた。

「とつとと開けろ！ 開けねえか！」

喚(わめ)きながら力任せにドアノブを引っ張るが、ガチャガチャいうだけで開きはしない。

腹立ち紛(まぎ)れにドアを蹴(け)り飛ばしてやると、背後で誰かが息を飲む。

「ああ？」

反射的に振り返り、音がした方を睨(にら)んでやると、一(いつ)斉(せい)に周囲の視線が横へと逸(そ)れた。

と。不意に車体から、小さな機械音がした。

さてはようやく窓でも開いたのかと、顔を戻せばそうではない。

反対側のドアが開いたのだ。

ただし横にはではなく、扉は車体の屋根に生えたような形に開いていた。

「うわ、ありえねえ…」

今時、こんな邪魔なドアの車に乗ってる奴がいようとは。

いや、そんな事より。

「やっぱ、どうあっても、乗れってか…？」

話すだけなら、歩道側にある運転席の窓を開ければ事足りるのに、わざわざ車道側にある助手席の、ドアを開ける理由は他にない。

「そうかい、そうかい、分かったよ。いいぜ。そこまで言うなら、乗ってやろうじゃねえか」

もう一回。ドアをガツンと踵(かかと)で蹴(か)ってから、高嶺は車の前を移動した。

その際、広いフロントガラス越しに、運転席に座る男を睨みつけるのも、忘れない。

険悪な目で睨め付けたまま、どかりと助手席に乗り込んでやる。

自らドアを閉める事さえせず、腕と足を組む高嶺に、いらっしやい、と入江が微(わ)笑(ら)う。

「で、どちらまでお送りしましょうか？」

「俺がこの車に乗った事を、少なくとも三人は、うちの病院関係者が見てるからな」

「それと警察官が二人、かな」

入江の指さす先には、派出所がある。

「だから先生。シートベルト、してくださいね」

誰かが外からドアを閉めた。

続いてロック音が車内に響き、閉じこめられた事を、知る。

一瞬、恐怖を感じたが、そんな自分に腹が立ち、高嶺は殊(こと)更(さら)ぶっきらぼうに、吐き捨てた。

「…どこでもいい。一番近いホテルまで」

「了解」

返事と共に、ゆっくりと車が動き出す。

車が動くと、派出所の前にいた、警官たちも動くのが見えた。

「で？ 拉(ら)致(ち)じゃねえなら、ここまでした理由はなんだ？」

彼らから、遠ざかるのは忍びない。

だが、最(も)早(はや)視線だけでは追えぬ程、車は動いてしまっている。

「先生。医者(い)の癖(くせ)に短気(たんき)ですね。ヤクザ(やくざ)の俺(おれ)より喧(けん)嘩(か)っ早い」

ロータリーから車道(くるまみち)へと、車は滑(す)らかに移動(いどう)を果たした。

もうこうなったら、黙(もく)って運(は)ばれるしか術(すべ)はない。

改めて高嶺(たかね)は腹(はら)を据(す)え直(ただ)すと、座席(ざせき)に深く背(せ)を預(あづか)ねた。

意外(いがい)にも、座(ざ)り心地(こころ)は悪(わる)くない。

「煩(わづ)るせ)え。御(ご)託(たく)はいいから、用件(ようけん)を言(い)え。俺(おれ)は忙(いそ)しいんだよ。言(い)わねえ気(き)なら、寝(ね)るぞ。俺(おれ)は」

脅(おど)しではない。本気(まじめ)である。

それほどまでに疲(つか)れているのだと、全身(ぜんしん)でアピール(appeal)してやると、何故(なぜ)か入江(いりえ)はクスクス笑(わら)った。

「別に俺(おれ)は構(構)いませんが。その前に先生(せんせい)、ダッシュボード(dashboard)開(あ)けてみてください」

映画(えいが)では、銃(じゆう)が入(い)っている場所(ばしょ)だ。

まさか、そんな事(こと)はないと思う(おも)うが、この男(おとこ)の行(い)動(どう)は普通(ふつう)じゃない。

「開(あ)けたくねえ…つってもたぶん、無駄(むだ)なんだろうな」

「別に。そういう事(こと)なら、俺(おれ)が自(じ)分で開(あ)けるだけですよ」

「だったら四(よ)の五(ご)の言(い)う前(ま)に、てめえで開(あ)けりゃいいだろうが」

面倒(めんたう)臭(く)え。

そう毒(どく)づきながら、高嶺(たかね)は自(じ)ら開(あ)けて中(なか)を見た。

入(い)っていたのは銃(じゆう)ではない。

銃(じゆう)ではないが、同(おな)じぐらい頭痛(づうとう)を覚(おぼ)える代(しろ)物(もの)ではあ(あ)った。

裸(はだか)のままの現(げん)金(かね)が、無(む)造(ぞう)作(さく)に突(つ)っ込(こ)まれていたのである。

帯(おび)封(ふう)のついたま(ま)まの(の)が、三(さん)束(たば)。

つまり、三(さん)百(ひゃく)万(まん)円(えん)あ(あ)るわ(わ)けだ。

もちろ(ち)ろ(ろ)こ(こ)れ(れ)が(が)本(ほん)物(ぶつ)なら、だ(だ)が。

「お(お)一(いっ)つ(つ)ど(ど)う(う)ぞ(ぞ)。お(お)礼(れい)と(と)お(お)詫(わ)び(び)と(と)お(お)願(ねが)い(い)代(だい)です」

「絶(た)対(たい)いら(ら)ね(ね)え」

即(す)座(ざ)にバ(バ)タン(タン)と閉(と)じてや(や)る。

「治(ち)療(りょう)費(ひ)は病(びょう)院(えん)の方(かた)でち(ち)ゃん(ちゃん)と請(こ)う求(もと)する筈(はず)だ(だ)し、詫(わ)び(び)なら俺(おれ)もし(し)な(な)き(き)や(や)ら(ら)なく(く)なる(る)し(し)な(な)。お(お)願(ねが)い(い)に(に)至(いた)っ(っ)ち(ち)ゃ(や)、論(ろん)外(がい)だ」

再(ま)びシ(シ)ート(ート)に背(せ)中(ちゆう)を預(あづか)ねると、高嶺(たかね)は顎(あご)を突(つ)き出(だ)し宙(ちゆう)を睨(にら)んだ。

「ヤクザ(やくざ)の頼(たの)み事(こと)なん(なん)か聞(き)きた(た)くね(ね)え」

「一(いっ)つ(つ)と(と)言(い)わ(わ)ず(ず)、お(お)好(よ)きな(な)だ(だ)け(け)ど(ど)う(う)ぞ(ぞ)。と(と)言(い)っ(っ)ても(も)ダ(ダ)メ(メ)で(で)す(す)か」

「ああダメだね」

「そうですか」

「ああ。だからな…」

食い下がっても無駄だ、と高嶺が続けるその前に、入江の声が割って入った。

「分かりました。うちのにはその旨(むね)伝えておきますよ」

「…って、嫌にあっさり引くじゃねえか」

あのしつこさは一体何(ど)処(こ)へ行った？

いっそ不気味に思っただけで、意味ありげな視線が帰ってくる。

「おや、もしかして、もう一押しするべきでしたか？」

「いや、それはねえ」

「残念」

そう言うが、入江の声は少しも残念そうではない。

まだまだ腹にたっぷり何か抱えていそうである。

だが、彼はそのままあっさりと、涼(すず)しい顔で口を閉じた。

クソ、読めねえ…。

なにを考えているのだと、喉(のど)まで出かかった言葉を飲み下す。

問うたところで、どうせ素直に答えやしまい。

それに、金の話を蒸し返されても面倒だ。

どうにも納得できないが、ここは無視して黙るしかないだろう。

そもそもヤクザのすることを、理解しようとするのが間違いなのだ。

どうでも良い事は、寝て忘れる。

それが一番、と思ったところで、欠伸(あくび)が漏(も)れた。

「お疲れですね。先生、どうかゆっくり休んでください。着きましたよ」

そういう入江の視線の先には、確かにホテルの看板がある。

ただし、色はピンクで名はエデン。

「ラブホじゃねえか」

高嶺は、即座に不平も露(あら)わに叫びたが、入江は、むしろ驚いたような顔で瞬いた。

「どこでも良いって言ったの、先生でしょ」

「だからって、ラブホはねえだろ」

「なんですか？」

どうやら、本気で分かってないらしい。

高嶺の抗議の声にもかかわらず、入江はラブホの地下駐車場へと、躊躇(ためら)う事なく、車を入れた。

「ベッドも風呂も広いし、なによりここが一番病院に近い。先生の言う近場って、そういう意味でしょ」

一体なにが不満なんです？ と続けられ、高嶺の方が言葉に詰まった。

確かに、言われてみれば、その通りだ。

「でも、先生がどうしても嫌だと言うなら、他、行きますが」

「いや、ここで良い」

シートベルトに手をかける高嶺を見て、入江がドアロックを外してくれる。

続いて、ドアがゆっくりと持ち上がった。

あっさりと解放の意を示されて、高嶺の毒気が一気に抜ける。  
半ば無理矢理乗りこまされた形ではあるが、結局のところ、ただ送ってもらった。それだけだ。

「…ありがとう」

なんとはなしに気まずくて、降りる前にボソボソと礼を言う。

いいえ、と短く返されて、尚更尻の座りが悪くなった。

これで終わりか。それでいいのか。いや悪くはないが、なんかこう、しっくりいかないものを感じてしまう。

だから、思い出したように入江が、待った、と声を寄越した時、一瞬高嶺はほっとした。

「一つ、大事な事を忘れてました」

そうか。そうか。そうだろうとも。

絶対何かある筈だ。

本文 p20～29 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>